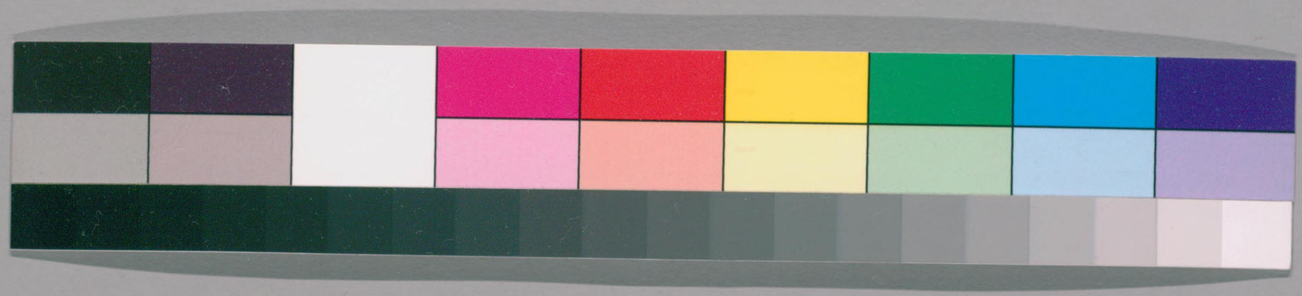


成形圖說

菜蔬部

二十八

145
30
1

東京圖書館
和書門
農書類
一四五 一五函
二〇架
一九號
三〇冊

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

TOKIO LIBRARY
東京書籍館蔵書之印
FOUNDED BY MOMBUSHO

成形圖說卷之二十八

目錄

附錦邊蓮（テンゲンレン）
雙頭蓮（アヤシキハチス）
千葉蓮（センヨウオムレン）

明治八年文部省交付

芝蓮（ハチス）

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之二十八

菜部 水菜類

波知須 書紀○今畧して波須といひ又波知乃多知枝などゝもたえこの

池見艸 莫傳鈔○蔵玉集新うつる花やくもらん池見艸波に加へ見て春蒸うのひ川

露堪艸 麿きつゝ花や咲らん露堪艸 水堪艸 花咲は波とや見

をらぬ枝にも風乃おるは 水乃花 祕中鈔○按に崔豹古今注荷花一名水花

にうゝふさかぬはきに

は○以上蔵玉和歌集

妻無艸 藻塩艸○一本通礼奈志艸

蓮 本艸○字典古文苓本艸には蓮藕を標しく水果部に入れ其樂用を主とせしが故に

荷 芙蓉 以上爾雅說文

荷花 毛詩○古今注作荷華

水芝 水花 以上崔豹古今注

艸芙蓉 楚辭注

澤芝 本艸和名引兼名苑○潛確類書作澤芝水具

淨友

朱華 以上事物異名　靜友　禪客 以上名花譜　水芙蓉 群芳譜　水
宮仙子 典籍便覽　淨客 華夷花水考　玉環 三餘帖　水荷 拾遺記　花
中君子 書言故事　禪社客 花鳥爭奇　水花魁 田家五行以上ハ蓮花の名なり
蕃名タラート　ウヲルトル
波知須蓋蜂巣(ハチス)あり其房(フサ)の形狀(カタチ)をもて名を得たりといへ
ハ孔(ハチス)などいふは甚妄說(イタリコト)なり伊勢家集にみごもりに
つゝはかこふかくしそあれにけり身をたちにはへん
もば生けりと謝(ヨミ)しハ身を
不慚(ハヂ)といふに託(ヨミ)たるなり蓮ハ本房子(フサノミ)の名後に華葉の
統名となれ而謂愛蓮白蓮雙頭蓮の如き是なり此間其
房子(フサノミ)狀(カタチ)に就(ツイ)て名を負(オホ)ふ此身然に允當の事なり埤雅に
荷總名也とあれども正字通に今俗荷皆謂之蓮(ヲ)とみえん

芙蓉(ハナハチス)

小蓮（チヤワンレム）

これが彼方を既く蓮とのこいひ習せしなり○此ものの藕に通孔て茄に筋線を蔵むこと大小ひとしうしば節毎に一葉一莖を出し又根鬚あり俗に一月に一節づゝを生し閏ある年は十三節ありと云

按續博物志曰藕生應月閏月益一節

○凡一節に二莖を生じて一を波知須乃浮葉と云

夫木集家

やどもなきを浮葉なるらん

花蓮 即本艸の藕荷なり

亦貼荷葉貼水荷葉

おこしもや浮葉なるらん

四月に生て各に貼て浮へるせ此ひに旁行て藕を生じて蓮乃苗といふ花鏡謂藕秧なり又浮葉の嫩く小きを稚葉といふ内膳式稚葉七十五枚とみゆ

夫木集家

わか葉にまきこめてこがしもや色乃光なるらん

本艸の荷銭なり亦公荷ともい

ふ荷錢象形○山谷贛上食蓮詩實中其一を波知須乃立
有公荷拳如小兒手注公荷謂小葉夫木集にいとへゑもの立葉の
枝に彼知須乃立葉と云歌のみを此せ池お風ちらし
ゟ本艸の芰荷あり五月に生て水を抜て植そのはいふ
ぞこの立葉の間に六月茎を出しく七月花を発くおもな
時珍所謂花葉常偶生不偶不生故根曰藕是也
ぞ花には数の色あり白紅粉紅
の三ツを正色とし白をもて上等とれ也心に黄鬚あり
即蕋にてながさ一寸許此蕋蓮房を抱く如く本艸の蓮蕋
鬚一名佛座鬚なり又蓮花鬚蓮鬚といふ○蓮ハ水艸の中にて奇絶
者にして香と色と實を讓侍れし溪蓀なども形劣るに
は涼しき蓮花に比ぶれバ及ぶべくもあらし

も当炎熱のなの穂照さくるのゆふべ池の汀に徜徉よ
れば若妹子が裾吹風のたよりに袖にしむばかりに此香な
どいとゞえならぬ折しも白雨あらんどの一きそれ雄る
ればほきと問ひし白玉の乗ちた枝乃葉末にたゆたふハ
さながら後る先だつ態まで時におもひ出らるべし緑
水紅蓮一朶開千花萬艸無顔色とから詩打吟ずるやば
濁れるぬより出て水よりも浄き蓮の葉乃亭々毛說
ゆともらくあるべし冰寒江の凝結せる泥の中より生
られども性ハ純陽の英氣をあつ稟得しれば初日光
に向く晁本午と過ぎば復斂むみ花さゝあば即實ある花

謝(チレ)ハ房(フサ)ゝえ房成(ナレ)ハ実(ミ)なるゝ房の形ハ噴壺(ジヤウロ)に似て
初ハ莢(キ)に終(ハテ)を忘(クロ)し葉は傘蓋(カラカサ)に類(ニ)て界紋(スヂ)なり始ハ微(スコシ)く
赤(アカ)く後ハ莖とともに縹緑(ハナダイロ)となるゝ莖ハ中通(ウチトホ)り外(ソトナホ)しく刺(バリ)
なるゝ地を傷(ヤブ)らず莖中に四孔(ヨツ)なり又ゝ実(ミ)ハ皆悉く
肉(ミ)白く心(サネ)生意を飛(カク)し藕(ネ)まゝ萌芽を展轉生生造化不息
の妙理を具存するとこちゝく称(ホメ)しをさるおとや禅説の
碧巖に荷葉の水を出る時いかん曰蓮花なる蓮葉の水
を出ざる時いかん曰荷葉なりと問答せしハ邵子が風
ハ天地の光に起り鱗ハ天地の後に立といひたん鱗用
一源の譚に習ひしなるべし○此をの和唐の二種(フタトホリ)大小

の両品(フタシナ)なり長丈餘に至るものを大蓮といふ小なるを
ハこれを引き花葉根実亦おもに称(カナ)へ用○一種茶
盆蓮といふ所用花の徑(サシワタシ)二三寸盆盂(ボンハチ)に植て几案の佳観(ミモノ)
となる所有数者遅暑(スヾミ)の清賞(ナカメ)に足れる大抵野生(オロカオヒ)と紅
花の者ハ蓮房(ミフサ)多く藕劣(ネオト)なり蓺植(ウエタテ)及白(ビ)花の者ハ蓮房少(スクナ)
なるゝ藕(ネ)繊(ベサ)なり花白きものハ香(カホハシ)く紅(イレナヰ)ハ艶(ミゴト)に千葉(ヤヘ)乃
有実(ミ)を結ぶ也大和蓮のごとき是なり又和蓮の子ハ榧子(カヤノミ)の如きが
如く唐蓮子ハ稍小く矣し

蓮乃莖(ハスノクキ)和名鈔　蓮莖(ハスクキ)通稱

蓮茄　和名鈔引爾雅其莖ハ茄○字典云茄通荷師古註茄ハ古荷字

荷　品字箋○時珍云莖ハ乃負葉者有負

荷之義

蓮莖中に絲ありて延引バ綿軟ありて絶ざるあと蛛絲乃
ごとし歌にそちもの絲と詠る是なり此絲を搜採して
紕をかけ紡緝て布を織べし此法諸本艸等いまだ不見なし
俗説に天平宝字の頃あれば製せるよしみえたり当時
藤原豊成乃女中将姫扶桑釋志作中乘姫大和當麻寺にて蓮莖
絲を搜て曼荼羅を織とあり曼荼羅譯して輪圓具足と
いふ当麻寺に蔵る所の者横直三尺計天堂諸佛の器を
寫し著ありて本藩坊津勅額所如意珠山一乘院に亦此
物あり 欠記中宮海に法下勅額の当麻寺の地に比せば
宣旨と此寺に苟蔵せり

大幅にして寛さ四五尺なれば圖ハ大率相似たり設る
に五彩乃色を著し侍るに金碧の光を用ひて精細毫芒
に入る其銘に天平宝字七年の金泥字を存せ按に新
曼陀羅といふあり天平宝字七年より四百五十餘年の
後保延四年阿波國浦莊にして絹を以て同五年六月功
成其畫工良賀法印源慶法眼銘文ハ明理大夫藤原朝
能也といふ蓋畫力の侍る五百年なるべし夫天平の世
を去ること已に千百有餘歳也一乘院に蔵る所ハ保延中
再び侍模せし者なるべし又僧の宣蓮念佛の感得にて
掌中より藕絲を探出せしあと蜘絲をまとふがぬくな

ましといふ事と畸人傳につばらに載たり人の中より
蜘絲のぶと絲の出るとハ蓮絲を深出せしにそはなく
バ蟲類に迎うるべし又奇しむに足らむや但我 君氏
寛政戊申の歳始て蓮布を製せ里先城池の蓮莖若干本
を採て宮内に致さしめ五六本を採て一把とし莖を
折り、從て莖中の絲を率出し其を水に漚し紕緝た
て、毎旁乃縁には繭絲おのく二縷げゝを縱線に加ふ
こは蓮絲の性脆その極点を施ざらぬ為の計とし緯
子にハ全く蓮絲のみ用ひ居るかくしてお婦の善機直
するものをして己を減ぜむ其法亦全く布縷乃製に

異なる事初て試に織る所の者長一丈五尺幅九寸なり
之ハ一端とす其一丈をいふ 今公兜盔の浮張 胄の
ぐりは本引立烏帽子ハ陣中の胄にてむかしは軍営と
いへども烏帽子を垂を忘て礼容を失ず因て胄を縮て
大將の前に出るにハ折さゝえたる烏帽子を
引たてゝるを其制からんと谷川氏いへり 並に戎衣
の襯衣となしてこれ珍藏とす五尺をもてハ畫面
に命せて佛像を圖繪て曼荼羅を謄寫これを寺觀に施
せり其餘ハ皆人の請ふ所に徑遺さるものなりといふ
臣國柱謹按に我 君氏好述の貴き豊富乃安に居て 君氏
ハ故堤中納言藤原代長卿の中女 今公の親母なり 齋服の成憲を仰き絺綌の勤
倹を慕ひ躬紡績の功を効し内治の化宮掖に被り女紅

の事備ざるなし其餘緒遂み蓮布の絮を試とおひ又径
て俗説の怪談を弄るみ庶幾くはしらべし彼中將姫の蓮
其跡を奇みせんあと攷按へ怪誕妄ゆみ有べうにざる
の事多し孟方便海摂の説のごと當麻寺織造藕絲圖説曰
中將姫剃髪名法如一食長齋精進念佛毎日書摸受經三
巻ヲ至次年六月筆竣ル計ニ千巻依テ此功徳求見佛ノ眞身ヲ七日在
堂一心ニ祈請斷食水穀以テ死ヲ自誓時六月十一日至ル十五日ニ
中過テ忽ニ有尼法相偉麗而王ル法如問ヲ師自何ノ而来ル荅ヲ径リ西
方ニ来ル我篤シテ極樂莊嚴ノ相ヲ為ニ君ヲ看如何云ノ久ノ所願ヲ也何時ガ
令ニ我ノ得見尼云須ク求蓮莖百駄ヲ乃可成就ス法如ノ告テ藤公奏
請于朝ニ敕許十八十九両日ニ荷莖折テ作絲ト穿テ寺ノ東北ニ一穴ヲ為井ト以
尼ノ付ス女ニ十三日酉刻忽有女甚端嚴来テ問曰絲入井染之五色燦然
自ノ女ニ女接云最好今夜可織今断尼亦営為メ共事ヲ子丑寅三時中用テ
乏ヲ機杼之聲清微四更ニ織成ス天曉女出三升ノ酒ヲ蒙戒刻ニ持織具ヲ来
乃一夜之中所生長ス一丈五尺無節巻テ而為軸持テ與尼ニ径去テ
不現尼掛之中堂ニ指圖中依正等境ヲ示ス法如復禮ス三拜唱倡ヲ

曰往昔迦葉説法所今来法起作佛事感君懇志ヲ我来此一
至是ノ場ニ永離苦ヲ既而尼告帰ヲ此時法如聳然私念ヲ適化女不
言而去今此尼亦或復然急ニ伸手ヲ抜執尼衣袖ヲ白言ヲ善哉知
識是何人哉如是満ニ我願ヲ又適前ニ所帰之女是誰尼云我是西
方極樂世界教主阿弥陀如来適所還女是我左脇観世音
也伸手ヲ三摩法如頂ヲ云再遇不遠却後十三年三月十四日
必迎汝ヲ即従座起テ至二上カ岳ニ隠矣至十三年法如年二十九
當宝亀六年三月十四日如所期而寂ス也云々或云光尼八
績紀ノ新羅の尼理願ヶ属ル且ツ拙君氏乃
蓮茄を宮裡ニ移ス初ノ如ク令シテ曰ク為ニ人
ま煩し給ふは他所の空仮ノ宿を取ル其ノ沼ノ
池宮沼を嫉ム間ヲ在ル者を妬ム乃チ
此ヒエ行ヲ素民を仁ムこと
の実次ノ如ク思意ヲ
乃曼荼羅を織ル中ニ
業ヲ蓮讃ヲ仏ニ
ら善おのづ

波奈婆知須（ハナバチス）古事記　蓮乃華（ハチスノハナ）　蓮乃蒼（ハスノツボミ）

芙蓉　和名鈔引兼名苑注蓮花已開曰芙蓉未舒曰菡萏也　菡萏　説文未発為菡萏既発為芙蓉注菡猶含也未吐之意○時珍云菡函合未発之意○花鏡云其蕚曰菡萏按廣韻華内曰蕚華外曰蘂　蓮花　綱目難産催生蓮花一葉書人字呑之易生

世継物語に関白道長公の菓花の程をいたむとて子とせの事乃霧秋乃霧ゆゑ立つくさしぞ風を動きなくして枝を鳴さねぞかほり増り世にみがたく目出たき事うどん花のおとくれに生（オヒ）たる花は喜さ蓮（ハチス）世にまぎれて匂ひたる事ならびなきがゆしとしたるもむべにしそあめれ玉乃小櫛に源氏物語は儒仏などの善無の

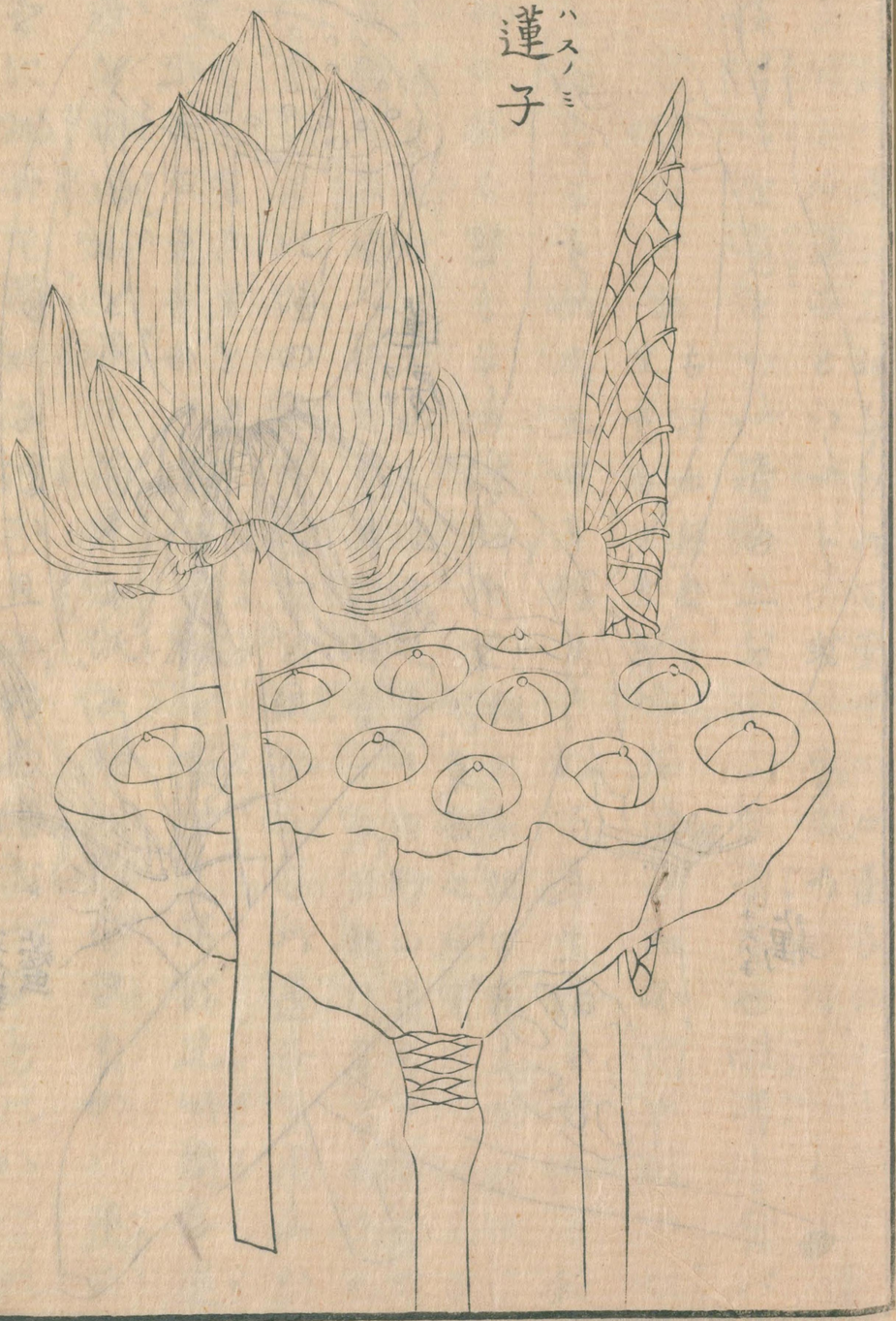
論はしばらく差し置て法しを拘たらぞ只物の語なれを志れるかたのよきを取たてゝよしとは志たる也此意（コヽロ）を物に譬て云ば蓮は植て愛（メデ）んとする人乃濁りて穢（キタ）なくはあれども泥水（ヒヂミヅ）を多く貯（タクハ）ふるがゆし物語に不義なる恋を書ふ事を濁れ泥をめでくにハ非ず物乃あたれの花を開（サカ）せん料ぞ然し源氏の君のふるまひハ泥水よりおひ出たる蓮乃花の世にめでくく咲ふほへる類としてその水の濁れるさとをば指（サシ）を言ぞ只情（ナサケ）深く物の感（アハレ）を知れるかたをとりたてゝよむ人の本に志たるさと今云んも安也夢溪筆談云菜品中蕪菁菘芥

之類遇早多結成花或作龍蛇之形熙寧年李賓客及之知
潤州園中菜花悉成荷花仍各有一佛坐于花中形如雕刻
李君之家奉佛甚厚因有此異又齊東昏鑿金為蓮貼地令
潘妃穿寶屧行其上曰此步々生蓮花也又唐の張昌宗が
姿色を以則天后に幸せられしを揚再思と云へるが今
ひとの六郎がもぐる蓮花に似たりとおもひ非ぬと
よ蓮花が却て六郎に似たるよと云ふやしもむかしハ
蓮花を海棠にもまさりて賞翫のしとゆゑぞ東昏則天
とも淫戯をなして國を亂し色に耽り穢を彰せしそ
れが汚名ぞ今に朽ずえぬ大清諸艸木方云七月七日

採蓮花七分八月八日採蓮根八分九月九日採蓮實九分
陰乾下篩毎能服方寸匕令人不老○灼艾爛瘡に花瓣を
貼てよし廬山集云遠法師下僧惠要者患山中無刻漏乃
於水上立十二葉芙渠因彼轉以定十二時晷景無差
波須布佐　蓮乃殼
蓮房　爾雅註蓮謂房也　蓮蓬殼　綱目
蓮房を食ふにハ嫩子時皮と蒂を去灰を入煮り後又清
水にて煮て灰味を去焙乾に掛て石をて壓め片に作食
ふ　遵生八牋○痔漏を治るにハ蓮房牽牛子各八匁當皈二匁細末
にし匕一づゝ空心に湯にて用ふ　和方一萬方

蓮乃實（ハスノミ）新撰字鏡其訓ハ和名鈔ニ按ハ○嬉娛日記波（ハ）
ニたもの安ひとも此をひとして入ニ至
加知須乃美（カチスノミ）本艸和名○按加は衍字也醫心方ニ加字なし波須須（ハスス）藻塩艸
乃芽（ノカヒ）是蓮子の心にて薏苡とも公荷とも云ものゆ蓮乃蔕（ハスノヘタ）即荷鼻なり
蓮子和名鈔引爾雅ヲ荷芙蕖其實ハ蓮　菂薂爾雅菂ハ薂　蓮實爾雅注
蓮實は内膳式ニ蓮子（ハスノミ）二十房（ブサ）蓮の子（ミ）は生にて食（クラ）ばあ（ウマ）し
九月ニ至ハ房（フサ）枯ハ子黒く堅（カタキ）ことゝ石のゆし黒き殻（カラ）を剥（ハキ）
去ハ葉中にあるを蓮肉といひ亦石蓮子石蓮肉ともい
ふ水ニ浸（ヒタ）し青（アヲ）波（カハ）青（アヲ）心（ニン）を去（サ）生（ナマ）にてもよし陶弘景云藕
實（ハ）即蓮子（ナリ）八九月采（トル）黒堅（クタ）如（キ）石者（ヲ）乾（ホシテ）搏（ウチ）破（ワル）之（ヲ）圖經云其菂至
秋黒（ニ）而沈（ムラ）水（ニ）為石蓮子（ト）按本艸從新云石蓮子産廣中樹上又南寧府志云石蓮子生藤云々此

蓮子（ハスノミ）



二説ハ並ニ本物なり此間藥中の石蓮子にあらず
茶舗ニ石蓮子といふ物の或ハ贋品あり辨ふべし○蓮
実中心を薏といふ青白二分の小き青芽也酷苦し食バ
吐となりと云 古詩云無棄苦心石蓮子を不老不滅の性
を存するものなり土中ニ埋まる好百年生活を新
物のかくなるものなり綱目孟詵曰諸鳥猿猴取得
不食藏之石室内人得三百
年者食之永不老也又雁食之糞于田野山巖之中不逢陰
雨經久不壊人得之毎且空腹食十枚身軽能登高渉遠也
○煎塩戸北塩の浅やかやを試ふ事は此蓮子を用ふ
事実ハ舊き者を用ふ即石蓮子也将ニ鹵鹹を煎としては先竹筒ニ蓮
子を内海水を承て筒中ニ沃ニ塩の浅ぎまるのハ蓮子
おに跳升て筒口ニ浮む且上好乃塩浅べきを此ハ実此

浮上る勢極疾して筒れに逸出れ下等の塩なれば徐遅
として浮むありかく歳こびも更試ひとき蓮子乃浮上
らぬものも塩となりさるの説あるが如きなゝお棄る
むとせ若誤て其生を煎生ば竈吹動して破裂むとあり
是塩を造者の要訣なり 綱目藏器曰石蓮子入水必沉惟煎塩鹵能浮之此物居山海間經
百年不壊人得食之令髪黒不老印本
に煎塩鹵能浮之と讀せしハ誤なり 今按に西溪叢談云
閩中之法以雞子桃仁試之滷味重則正在上鹹淡相半則
二物俱浮と志かれば雞子桃仁にてもみ鹵を試つ煎し
蓮子味甘性平にして毒なし○主治中を補ひ血氣を益
ひ 本草 ○二聖散精を失し或ハ又漏泄し久して虚なるに

は蓮子心撮一辰沙匁一細末し毎に二匁許空心の時白
湯にて飲べし 瑞竹堂方 ○石蓮肉蓮子六一湯心經の虚熱に
て小便赤く濁まゝるにハ石蓮肉心を連ぬ 六 甘草 一湯
に煎し飲む 捧心方 ○蓮子湯 虚勞の吐血及暑血を治む 蓮子 去心七箇 糯米
廿粒 細末し酒にて服 美安方 ○歯の浮にハ蓮肉塩 各三分 水に
てよき程に煎し服べし 和方一萬方
波知須婆 万葉集○又歌に蓮の青葉蓮の捲葉蓮の枯葉なども同じ
葉 蓮黄葉 以上延喜式
蓮葉 史記亀策傳亀千歳遊于蓮葉之上亦云荷葉 遐 和名鈔引爾雅其葉遐郭璞注遐亦荷字
葉を飯に和て茹にべし先新しき葉を釜底に布て飯を

裹く炊なす飯盛みく清潔を要し今洞穴丸の棚と
ちそくの器也み蓮葉飯少ゝ雑菜と和ゑを湯み煮く
其汁みて炊方よろし菜みて飯或味噌の数を包び暑月
を慢らざとゝも大炊式に荷葉三百枚宇蘭盆用とそも
字佰み中元乃日祭祖時みそを案に饌具盛の古風きも
祭祖今ハ精霊祭とつゝ或ハ盂蘭盆會とそゝ推古
紀十四年七月十五日始テ盂蘭盆會を修ら給ふ中古ま
でも暮春と冬至とに先祖なを祭ると云ハ神代藻塩草み先
祖を祭るなとゝ人の思法と誠とくゝもの
前祭と云ハ神霊家とやあら公家みハ荷
名て水棚と称ふ古の人祭みる仏精霊祭みハ竹を編て假架とし
はの意也みそ火を裝て祭ると云ハ天地の
霊物かゝも〇代醐編ニ曰盂蘭盆説皆王佛經ヲ及テ讀ニ釋氏
要覧ヲ而盆字又無ニ看落後見ニ老學菴筆記ヲ曰故都於ニテ中元具ニ
素餑ヲ于古先ニ織レ竹ヲ為ニ盆盂ノ状ニ貯ニ紙銭ヲ於中ニ承ニ之ヲ以レ竹ヲ迫ニ焚倒ニ
以視ニテ方隅ヲ而占ニ冬之寒煖ヲ謂ニ之ヲ盂蘭盆ト乃チ知ル風俗祀レ先ヲ全無ニ
佛氏ノ之意昔ゝ槲葉ヲ食物を盛と同しく荷葉ヲも用ひしと
みえたり其食物の傷ざるなみ取ましもるべし萬葉
集巻十六に載る時ニ府家備設酒饗宴府官人等饌食盛
之用ニ荷葉諸人酒酣歌舞乃開テ其荷葉ニ作レ此歌ヲ歌ふ久堅ゝ
雨とふるぬれもそぬれもたまもかる荷葉にもる玉のごとみえて
いみしへ人質素の風情ゝ想ひやるべし後世歌學未ゝ深
纖麗ニ於ニ艶色ニ靡ニ漫漸ニ于誨淫ニの類と日ゝ況ひらく深る
色ゝ又續紀 光仁天皇宝亀五年八月始テ設ニ蓮葉之
宴ニ後紀延暦十二年八月獻ニ蓮葉宴飲奏ニ樂賜ニ祿ヨしそゝ

こゝ西土にも是に似たることあり淵鑑類函に載せ拾
遺記云歐陽修在揚州會客取荷花千朶插畫盆中圍繞坐
席命客傳花人摘一葉盡處飲酒云々與ゆるべきわざな
めり○應永廿三年正月伊豆國三島池に荷葉生たる先
例兵乱の兆也と云々枕冊子にたすの浮葉のちらるけ
に可愛といふ意也のどるに澄る池の面に大きなる小きなひ
ろごり深ひて行る宛おかしゑ所あて物おしつゝなど
しそんるもなにいみしうれしし○脱肛不収にも蓮乃
浮葉を焙て粉にし酒にて服ことゝ外々たちの葉に右の
粉を盛りたるに發てこれに踞せ○漆瘡には葉を乾し

湯煎して洗ふ蓋し遵生八牋曰金蓮花夏採葉梗浮水面
湯焯薑醋油拌食之按に同書に載せ金銀蓮花湖中甚多
園林盆泥蓄水種之但取二色重臺者
可愛と葉梗を食ふもの此種にや但今
の常蓮食ひ蓋ふの法亦是に同し○小兒臘梨根を治
るに蓮葉黒焼白梅肉各等分能加減に煉り繩梨根に附く
但し出来愈がるきによし附根大きなるに附ひにいい
かにも薄き青銅銭を附ゆ縮にハ銭ふるを附べし鉢の
目なり膿出て治るなり廿日許附て煎き強にハ洗おと
はべし附る時ハ毛を鑷に洗ひ汁ハ酒の粕湯にて按出
し熱して洗ふ一度にて愈がねバ又附べし二度めにハ
必愈るなり○又方粟鉢黒焼とハスに又カ針をして銭を

ふさにして上の如をぬりみ紙ふたをしてよく蒸しその
後よく此方を附るあり○みそ方　癰ハスみやよし凡瘡　蓮葉
山ノ白ノ茎ノ石ノ菖蒲（フヂコブ）藤（サルカイバラ）藜（名ヲ）莢（ミス）分　煎し洗ふもの外めは薬味の多少み同じ○又方　癰ハスの穴よし凡瘡
瘍（エアウ）疳（ヒ）を治まよしハスの穴ハ　腑骨（メデ）淋（ヒ）ぬきの方蓮葉成霊仙（ハボロシ）名ヲ
別と字分みしもみて等分なり大服み煎して用ふ○癰
をあふ時分の事ハ肉腐（クサリクヂ）爛（ヒ）て臭き時より洗ふそ方車（オホ）
前（ハコ）ま蓮葉桑木枝茎芦三味み垣少入てぬるくと冷おら
ふ垣ハ夢のくひ垣よりもみからくそづし○漆瘡（ウルシカブレ）みハ

蓮葉（スノハ）をみて蒸し洗ふづし○歯（ハ）歯（ハ）ノ痛（イタ）ミ蓮葉甘州ラン
クワ（ハラヤ）軽粉昆布石膏（ナンテン）燭葉名ヲ分
ともて丸め綿（ワタ）ニ包こ含むべし○牙痛み蓮葉肥松（ニツマツ）枝（カイバ）莢
茎根（クキネ）共名ヲ垣ハ分　み味おし垣ハ水を天日二壺ニ壺
み煎し含むづし○三種歯（ミクサノハ）の薬蓮葉（ハスノハ）藍（アヲ）殿（ダイ）名ヲ二分宛一
両ニ壺の表裏（ウラオモテ）み針をつきあらわしてよく擦（スリ）附
べし○蝕歯（ムシハ）筋歯（スヂハ）み蓮葉三ツ塩一丁子（チヤウジ）名ヲ粉（コ）をみて煎し含（フク）
むづし○み方白礬（ハクバン）を繋（ツナ）ぐ縷の汁みて綿（ワタ）包む方の耳（ミヽ）み耳
肥（カキ）一ツ　ハぐのべし○大舌（オホレタ）小舌（コシタ）舌上み腫（ハレ）を生（ヲ）
ゐみて次即重舌（ヂウセツ）あり　蓮葉（ハス）を
ゐみて茎（クキ）のめく煎して含（フク）むづし○婦人血暈（チウン）みハ蓮葉

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

陰乾紅花艾、三味等分水にて常のごとく煎じ用ふ或ハ那を
少し加ふ◯婦人産後胞衣下らざるにハ蓮葉黒焼細末にし
童子の小便にて用ふ◯痔の洗ひ薬 蓮蘂 黄蘗 山梔子 三
味を煎じ塩少入て能く洗ふべし◯吐血にはもよし鼻衄に蓮
蘂 生地黄二味 蓮蘂を研地黄を末にし少入研さて湯
にて用ふ◯又方 老蓮の蘂 蒲黄黒焼炒各細末にし白湯又
ハ冷水にて七つづゝ用ふ◯又方 釜墨を細末にし冷水
にて一匁に二匁づゝ用ふ下血便にもよし◯白禿小児頭瘡
お洗薬 蓮蘂 黄蘗 各等分にて煎じ頭を能く熨て而硫黄
石灰二味布に包み麻油にて煎じ其汁を附るべし 第一

禿に妙なり 以上和方 一萬方 ◯四味圓 吐血を治む此薬は手足裏冷ば服べからず
荷葉生 蓬葉 柏葉の葉生く 生地黄 以上等分搗合て◯是
などに摑丸めて毎服二丸を水三盞入て一盞に煎じ滓
を濾く時を定めず服 鼻衄にも良◯一方 馬車より落或は高き處より墜
て石に腰をうち筋を傷ひ損て中院に血止て熱に逢
は鮮血を突き又は瘀血を突く或は黒大豆を煮さ
ば汁のごとくなるを突 是を内傷と名く 荷葉を炙て乾かし細末し米湯にて
て毎服二銭を服べし◯産後に身腫には荷葉を煎て洗
へよ◯雙荷湯 頓に吐血する新しき時に用ふ 荷葉七箇 藕節七箇の二味
を蜜に漬て炮て乾かし細末し水二盞入て八分に煎じ
滓を濾て食後に服二三服めに少しく癒 以上萬安方

ハチス
波知須乃根和名鈔　蓮乃根ハスノネ　京畿○東國みて蓮ハス
須乃波比同上　蓮葉乃波比ハスノハヒ　和漢圖會○波比字ハヒ朗恒集○波撰集比を伊の假ハ誤せ延喜式生ハ誤て並ミ生ル
波斐ハヒ　波衣エ　あの万葉みゆ
乃弱根ワカネ　延喜式攝藕十五條と
乃芽メ　蓮乃嫩根ワカネ乃芽立メダチ　以上藕
玉節　蓮本　氷船　氷房　雪藕蔬食　雨艸　蒙牙
龍　稷實　以上典籍便覽　舍樓伽正字通藕の梵名也
蓮藕ハスノネ　池泥イケヒチの底を佇ソバメ　ゆゑ深く掘ざれバ採ざる
京ゆへ憚ハバカル　系祀の日多く此を
ものハ圍みニ寸　京ゆへ大なるを鬻ク大なるハ脇ヒラの如

成形圖說卷之二十八

十九

し一節ヒトフシ　もさ尺計　芰ヒシ荷ハス　莖クキを採て　花ハナ　莖クキを根ネ端サキ
芽ノビ　曇る也　老根ハス　を裂ヒラケ　ばそなへ根ネ　枯て朽ル　と稽フルキ　と相アヒ代カハル　こ
とゞなる○類聚雜要千物　五坏の中蓮根あり　日次紀事
曰種ヲ蓮ノ根ネ　本年開バヲ　花ノ　其根難ニ　隔ト年ヲ　無復花ナシ○螢カヒ　色白し　藕
の節フシ　端サキ　より出るものゆゑ七八月　やわらの蔬ナ　とし食ふべし
粥　烟の歌み蓮葉のもひまそく　ひぢの中よりいつ、契沖曰葉ハスノハヒ　蓮はちすおもあれバ用を
るを　ゆゑ名つくるなるむり　蕊ハナシベ　をもちゐ　搽トリ食ミし
とゞそろふ生ま　みてを　佳ヨシ螢ノ孔中　綠ミどりくて蕋ズイ　稠シ字
凡藕ハスノネ　冬裏の候トキ　搖ヨリ食ふ也　白花の藕ハスハ　生ナマ　みて食ふ　よし

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

和花及聖生の藕ハ煮蒸くよろし藕を煮ニはなかゞら淪
ばを軟にてはを剝て淪ば硬し是親く試みし所なり又
煮ニ鐵器を忌む又醋をかゝるとき黒色ニ変らず○生藕
を洗きまぐらし汁をとり水飛し藕粉を製る又舶来の
ものは西國米てふものも藕を用ふとし藕を餅となし
て食へバ下痢を治す蓮粉を製ニハ蓮肉を取去と多少
ニ拘らぬ水ニ浸て脹かし紅はを洗ひ去ぎ其心ハ擇と
り去て水とも二磨て漿さ成し絹袋ニ入て渣を絞て其
粉を水にて漂て渋水を去清るを待て水を漏し又〻包
袱乃内ニ在て水を滴め尽して晒乾ハ再び搗て束とな

し磁器ニ貯收て聴用ふ蓮粉能腹中を補なひ神氣を益
壯し水穀を消し肌膚を實ハ遵生八牋○煮凝ハ藕ニ薇平茸
思葉麸捲湯皮或ハ厳革茸薯蕷麸包豆腐皮の類を淡醬
油にて煮冷し定め或ハ寒天を解和て暫く安バ凝結す
のをいふ大皿などに盛り花六條豊水仙色寒天等とす
ゝひ金柑酸醤の類を飾り加ふ又蜜柑等を用るを俗
敷乳柑と云香氣宜愛ハ無し○蓮ハ根葉花実蘂心梗肉
の八件ニ一ツとして薬用ニ供ざるなし水菓中の料品な
り俗ニ蓮根ハ七年の舊痕再び発るといふハ其功能の
秀たるをいふ毒なりともるニハならずむかし水戸乃

朱子瑜周茂叔を賛せし辞に曰王安石以知慧術數逢其
君為禍方烈先生委之不可爭之不能是故愛蓮以間神志
推大極無極以寄肥遯意深遠矣後之君子不解其故乃云
こは古人比興の意佳々是なれ但し周茂叔蓮を愛して
花乃君子とし其不可褻翫焉といふもの意味あるを知
れ無し凡愛する者ハ必弄玩に至り久しく惑溺に及べ
ば佛氏の蓮を愛するごとに已まげ惑溺の中にはらざ
るや否や位に弄玩するに過ぎるの輩多し而を世人率
蓮を以佛氏環内の物とし外視におもつる亦惑とも
ふなる無し朱子瑜のかきを道を以て大節を屈ざるの

誠にして而後周子蓮を愛するの深意を知れ無し朱子
瑜字ハ魯璵舜水を以て称に本朝明暦中明國清に亡
さる舜水明主重興の命を受く然れども力微に兵疲れ
て皇國に來れ救援を請て恢復せんことを謀るまゝ
其志を果さざ當時國姓爺鄭成功が舜水に贈る尺牘に
台下倣採薇客而莫忘國恩の言あり其志成ざれども彼
胡清に俛伏して節を失ふの位に視れば誠に一世の偉
人なり故に宋の王安石等乃論人臣となりて其韻府曰
君に貳あるを恥むの意言表に見るべき事なり
蜀郫縣大竹截為筒盛酒閉以藕絲包以蕉葉信宿香達于
外曰郫筒杜甫詩酒憶郫筒不用酤是なり
藕味甘性平にして毒なし○主治胃を解き食を消し酒
毒を解く又雜物にても目を瞇に大藕を洗ひ搗て綿
布に裹き汁を滴し目中に入れは出げ○凍肺裂圻には

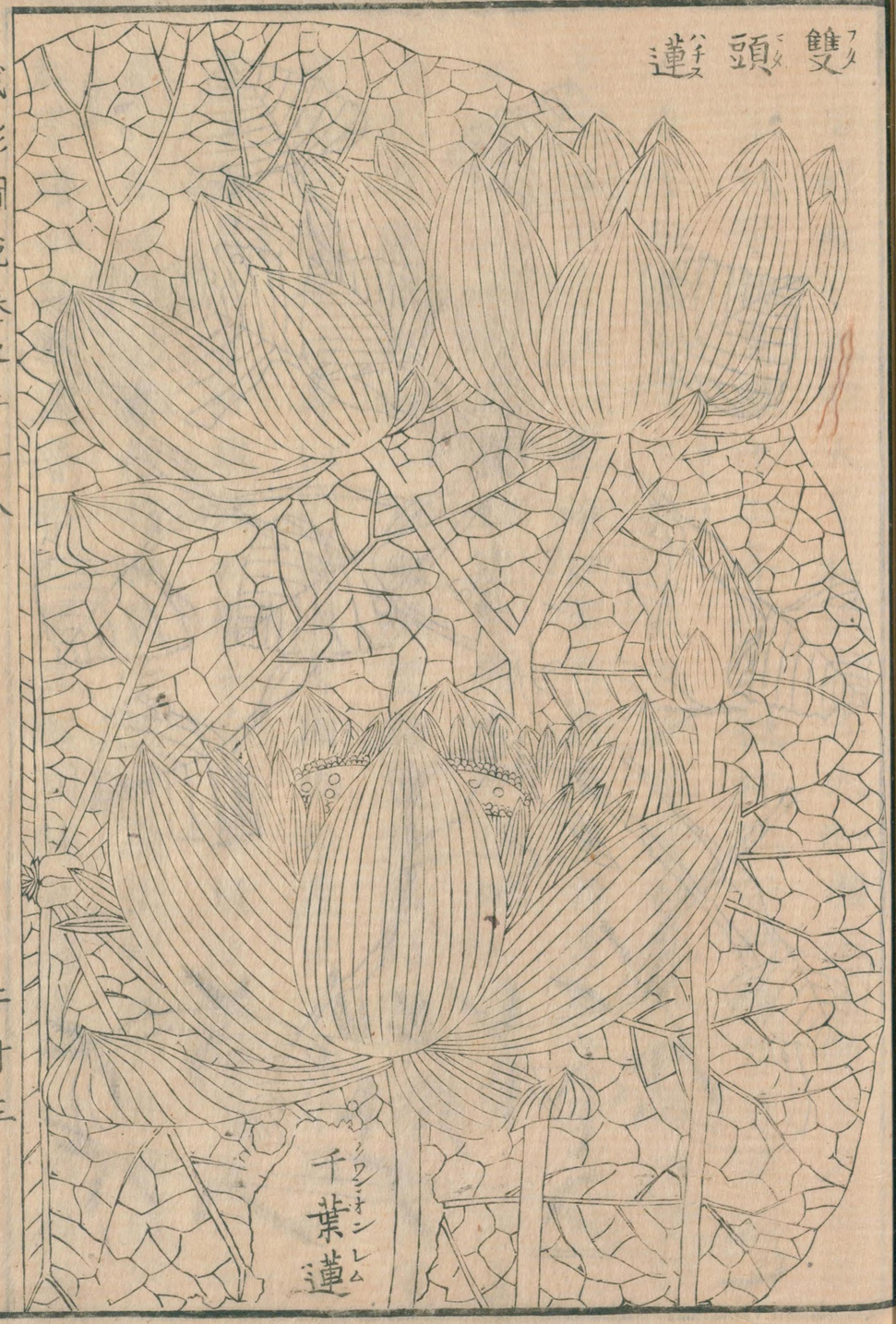
藕を蒸し熱し搗ながらして塗る以上本艸○小兒大小便不
通に八蓮根葱白生薑各等分豆豉二十粒塩少の味研合併の
如く扁厚して繃の中に押辺上を衣にてたるべし和方一萬
方

藕粉味甘く性平にして毒なし○主治痢病の人及び崩
漏に用ひてよし本朝經驗

天竺蓮 十二時蓮以上隨觀寫真○十二時とハ晝夜開法ゝくをもて名を得事

錦邊蓮 花疏○按に秘傳花鏡等に蓮の異種二十餘品を出せ事然せ未詳者ハ今復載せ又雙蓮の如きハ
呂奇ふ
のミ

此その白花にて葩の邊每に一線赤紅此暈にて花鏡云或黄な
な暈此を
のあり 疊取萎ばみ六日を經て後脱なる因て奇貴と
せ○又一種一幹に花十二ほど罫を近江西野洲郡
田中村の名主田中某家に十二時蓮あり其蘂一房にて
六花あり白蓮なり是即後に見えたる觀音蓮なる歟し
或云是本天竺の種にて達磨より梁武帝に献せる所なり
是と其説の迂なるや辨ふに堪ふ按に達磨が持し蓮
に一枝の花を罫き座雪人腰を没せるに似たりと云寓言
に率預たる類なるべし花疏云錦邊蓮蒂綠花白作蘂時綠
色已微界一線紅矣間時千葉每葉俱以胭脂染邊真奇種
也



瑞蓮書紀　両岐蓮　金絲蓮和漢圖會ニ其の八形紅にて花瓣に金芙色乃線文瓣角に

ゆゑの弟のごとし　金蘂蓮地錦抄

雙頭蓮　雙蓮　苹以上祥瑞圖　瑞蓮皇甫湜記　並頭蓮　嘉蓮

以上群芳譜　並蒂蓮百花詩艸花譜　催生艸綱目時珍云雙頭蓮一名催生艸主婦人産難

左手把之即生

舒明紀七年秋七月瑞蓮生於劔池劔池在大和國高市郡石川村一莖に

二花ハナ而ハ其とアラえる事　又按皇極紀三年夏六月於劔池蓮中有一莖二萼者豐浦大臣妄推曰

是蘇我臣將来之瑞也即以金墨書而献大法興寺丈六佛云々蓋祥瑞素懐に足らざるに自献して佛の霊異

に附託せ亦疾ニクム　按に萬葉集に御佩乎劔池蓮葉尓渟有水

ごとき の類多し

と詠めるがゆゑ劔池いみし事よりて蓮乃名地なるに似

雙頭蓮

千葉蓮

こと續紀　元明天皇和銅六年大和國献嘉蓮とみえ其後三代實録貞観十二年七月従四位下行伊勢守多治眞人貞峯献蓮一茎二花○大日本史養和元年六月有雙頭蓮生法勝寺池○大治四年七月有雙頭蓮生鳥羽宮池○保延四年六月有雙頭蓮生勝光明院池又曰七月上皇修孔雀經法於押小路殿禳雙頭蓮怪其後徃々みえたり挽近宝暦十二年江門塲上寺園山の蓮池に生じ随観寫眞に未発ざるときハ双頭の蕾よく別れ既に満開すれバ一蕚のごとし○孝經援神契云王者徳至於地則華苹感○群芳譜云並頭蓮晋泰和間生玄圃謂之嘉蓮今所在有之

芰（ヒシ）

○花史左編云宋文帝元嘉間天泉池池蓮同幹○花鏡云
並頭蓮紅白俱有一幹兩花能傷別花宜獨本藩城池此物
結々花を吐く皆奇むに堪らざ○又一種雙岐蓮あり是
一莖に了叉をなして二椏となり各花を穿くなり隨觀
寫真曰寶曆八年江の不忍が池中に此ものを生せり○
和漢名會曰大紅蓮花淡赤色取芭蕉に似てでよりも窄上
里褪時を亦同し五六寸臺をなし梢に岐ありて花さく
而實のうゝ沢といふも雙岐蓮なる事し取芭蕉に似たり
といふものは其形の一変しこれならん觀音蓮とまが
ふべからざ

觀音蓮 漢の異名亦同し

千葉蓮 華山記○花鏡云千葉蓮生華山頂池内○華山記曰因名華山
或云近江西賀州觀音寺に此をのみ有り土名にて
から觀音蓮をもて唱ふ花蕊小く重瓣にして加さ
弥厚く莖の端に簇生とそ今按に學圃雜疏云若所謂並
頭品字四面觀音名愈奇愈不足觀切勿種とあるに是が
觀音にて名必しも近江觀音寺に出るにあらざ元是
一種此蓮なるのみ藩中亦此種あり

○種植扞挿法蓮をうゝるは埴土田土よろし皆能水を
蓄なり肥壅は渚土埃壒よし按に蓮性清淨して糞溺油

臓(ラ)の類を畏(オソ)るを忌む宍桐油又蓮池(ハスイケ)に人の迎(カヨ)ふ橋(ハシ)を架(カク)せばを、
下(シタ)ハ藕引(ヲ)長(ハヒノビ)ず或(アルヒハ)汗穢不潔を澆灌(カクレ)が葉莖(ハノキ)朽臭(クチクサル)こと好き
肥れの也に茎根に沾(ツカ)ざれやうに注沃(ソキカク)るを培養(ヤシナヒ)の法と
も蓮魔(ハスカメ)也(モト)より其(ヤ)多(ヤ)かづし方(タ)なる石盃(ハチ)などに植るとも
ハ藕芽偶角(ハスノメスミぐ)に衝当(ツキ)其(ノビ)ぐるし又夏月(ナツ)水を缸(ハチ)に平にし
上より其前溲(ユハリ)を生(モ)ばそ肥を交て花盛なりと云り○盆種(ハチウエ)
ならば啟蟄の後先(ノチツ)池の泥をと其上に舗平(シキヒロ)ずて日に
晒(ホシ)り泥の芽坼(ヒハルヘ)を候(ウカヾ)ひそし雨ふるとも是ハ是を掩(オホ)ひつゝ
春分(ヒガン)にむ其藕秧(ハスノメ)を東向にして庚(ヒ)くハ枝頭を南向にす
と見えたり其ハ東向
に植(ウ)ハ東向
はあらず疎(マバラ)に植(ウ)て再び肥こる泥土をもて露(モレ)めなく

好(ヨク)壅(フサギ)て前法(ゼン)のごとく復晒(ホシ)て坼(ヒハル)を候(ウカヾ)ひそ、時流水(ナガレミヅ)を汲ミ
缸(ハチ)平(イツハイ)に貯盛(タクハヘイル)なり花譜云酒甕(カメ)などの頭(ホトリ)酒の灌(カリ)こる泥を取り種(ウ)ハ早く花芽(ハヤ)を○分栽(ワケウエ)
ハ春と秋との時分よし凡(ソ)実一(ヒ)りを植(ウ)ハ其(ハ)多量の根を
分ち繁殖(フエマセ)又実(ミ)播(マキ)にもれば生(ハ)ものこと遅(オソ)し秧種(ナヘウエ)なれ
ば発(イヅ)ること般(スミヤカ)なり紅白の者一変に植(ウ)ハ其(ハ)白きのハ枯(カル)
るなりよく一池の中に好(ヨ)ふを雑栽(マシヘウエ)ぜうらず其(ハ)の多
きうるに変(カヘ)るなり○一法二月頃蓮實(ハスノミ)の尾(シリ)の尖(トガリ)を斫(キリ)さ
ず小窓(コハチ)にれを蓋実(イレミ)を入て日に中(アツ)ハ七日ならず白(シラ)
髮(ヒゲ)の嫩蒻(ワカ子)を生(イダ)す又に窓を出すを候(マチ)て別窓(ホカノハチ)に田土を取(トリ)
て移植(ウツシウエ)れを貯(タクハ)也ハ其小(チヒ)さく自艶(オノヅカラミゴト)なり常に水を盛(イル)る

然し地錦抄云蓮を移植るには箸を以て種を蒔しまに執
子裝入鷄卵殼内將紙糊好開孔與母鷄混衆子中同伏候
雛出取開收起蓮子先以天門冬為末和羊毛角屑拌泥安
盆底種蓮子在内勿令水乾則生葉開花如錢大可愛是今
の蒸碗蓮の類にしてみおのづから一種の小蓮となる
その時の古今醫統云蓮萌投淨瓮中經年移種則發花碧
色芙蓉先一夕以靛水調以紙蘸花蕊上用紙裹之來日開
花亦成碧色○花史左編云青蓮以蓮子磨去頂上些少浸
靛缸中明年清明取出種之花開青色磨に小砥を用ふ
○地錦抄曰蓮花の罅けし後は葦蘆をもて掩とし風雨
を防き烈日を遮る然し農政全書に蓮をうゝる法喜の
ましめ藕をもつて既をはゞ池泥の中にうゝ生ば當
年即花さく小根は深水に種蒔からば長ありて後深水
にうゝ蒔し糞越は豆餅をおけば益盛なり○又子をう
うるには黒く堅きを用ひ縄に挾ミ泥中に生縄を結ぶ
れく蒔し如此されば各座に根ふかくみみ泥中にふか
く沒いらぬて生やすし又七月蓮子の始て熟して嫩を
もてなく植蒔し遅くして子堅くなれば生がたし又藕
の節よりうきみを生じ折てさきを種蒔し○花譜曰唐
蓮は其實成泥中にうゑてよくやしなへば當年花さく
或來年罅く又盆の大小にしたがひて花葉に大小ありて
小盆にうゑても花さく三年過ぎては花色變じて和蓮
のごとし故に年を逐てうゝ蒔し又黒に植るに大黒に
も一根小器にも一根なる蒔し大黒にも二本うゝれば

茂らぬ池中に和唐の種を雜へらゝれば唐蓮は枯るなり深黒にうゝれば莖高く淺黒に枯れば莖ひきし廣き池にうゝれば花よく茂り屋をしの大豆をあにひたし搗碎て蓮根に塗ばしげる雪花菜をよし場氣あるハ何しゝ凡蓮ハ人の垢汁膿血六畜鳥獸乃血肉を嫌ふ蓮池に蚍蜉の類を入れば消去るなり蘭の人の脂水を好むと異なり混湯の脂水或ハ婦人の經あなどを蓮池に入ばふ消るといへり○蓮枝を扞乃法何ぞ遵生八牋に記在十一月中將嫩條剪下砍作一尺一條向陽地上掘坑埋之仍以土掩至正月後起條遍插水邊林下無不活者當年即花とみえたり

○養花插瓶法蓮花を瓶中に養る法は花未滿開ざるものを築ち晩景に乘て水きもの上を絲にて緊く結きて剪ぬしを風雨なき時ハ瓶に插ながら潤を蒙るやうに霧雲ぬし折に水中より剪ぬらば剪口乃竅より水入れば根損傷むの剪きを細金ハ脂出て糯氣脫く固折雲を結びぬして剪ぬしを動きのならば倒にならして莖の中に水を連に沃きの是て後折口を割大豆を内にて不を結留て瓶に插ぬし一説に莖の中に池泥を充塞ぬ其口を髮毛にて纏きて瓶に插て後水を灌く雲

し紙どを捲(マキ)かなどはみ嫩(ワカ)て凋(シボミ)やすみはゞ竹筒(メケシ)を入てそれを摧(ヲレ)物(メノ)を抹(タスケ)おてそれを堅(カタク)結(ユヒ)ふ埒(ハシ)を火(ヒ)にて燻(ヤキ)り插(サス)あり折(ヲリ)を結(ユハ)ひ焼(ヤカ)ざるバ多(シホミ)ハ篤(ヤブ)疑(ヨ)ふ風(カゼ)なし又瓶中に沸湯(タギユ)を入るに花を立て手速(ハヤ)く瓶の曜(メ)ねやうに瓶口を穿(トツ)ぬやうにすべし蓋(フタ)ともぞみ裏(ウラ)秋の間ハ瓶中のあま風(カゼ)穴を紅(ベニ)なる程(ホド)に焼(ヤキ)きあてゝ投(イル)るバ瓶水久く臭(クサ)らずとぞ

令(リヤウ)猶中宮之有(中)婢(下)御閨房之有(中)妾勝(上)也蓮花(ハス)山磐玉磐(ヲ)為(ト)婢(ト)水樒(ハナシキミ)双(ニ)笑蓉(ラ)為(ト)婢(ト)之生花(イケバナ)の考(ミ)み蓮(ハス)おどきみ大山(ヤマ)の木(キ)を插(サシ)交(マセ)て一(ツ)みどるを瓶(カメ)みさしたおどいふしどに

蓮花(ハス)を限(カギ)て樹(ヤ)類立合(アハセ)ざるべし

百合蓮花を插(サス)べし○懸(カケ)瓶(ハナイケ)釣(ツリ)花瓶(ハナイケ)并(ナラ)び砌(ミヅ)等の盆(バチ)に蓮を插(イル)バ極て久(ヒサ)しく堪(タヘ)ざるを畳(オ)るなり必(ヨ)根(ネ)ごしを掘採(ホリトリ)て挿(サス)べし根(ネ)を枯(カレ)燒(ヒノコ)ときハ水(ミヅ)中(ナカ)に蔵(クシ)なく其(ソノ)中に蓮(ハス)の葉(ハ)の莖(クキ)を入て管(トリカ)束(ネ)ね亦(マタ)斜(ヨコ)めに插(サス)べし

ちみハ花瓣(ハナビラ)を隕(オチ)ざらん為(タメ)に欲(オモハ)ば蜘蛛(クモ)の絲(イト)をもて二

なそもあれど善(ヨ)き盆(バチ)ハ花の盛(サカリ)を助(タスケ)長(ヒ)さゞるし此(コト)等(ナラヒ)斬(ヒメ)新(シン)

そして品(シナ)等(ナラヒ)数法(カズ)あり

七志古事記

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

美須毛艸 秘藏鈔 こほれ池乃岸吹風のゆふ浪に沈みかゝるひしのみは藻ぐさかくれ

芰 別録○字典 古文作𦲷蓮 蔆 字典或作菱 陵 蔆並同 厥攈 菱角 以上爾雅郭注

水栗 風俗通 水菱 本艸蒙筌 沙角 綱目 紫角 翻雞 子陵

蟾蜍股 水客 胡蓮兒 蒙古方言○以上事物異名 穿萍 名物方言

此をの比志といふハ其實の稜角ありて嶮をいふ應神紀に河派江乃菱殻の刺も知らに皇極紀慎の字を比志と訓しを今云比志介流也と注し和名鈔征戦具引云鞴又兩岐鍼讀比志と又籠以鍼施棹頭因以取魚也此を比志といふハ其双の魚を刺べきをもてなり 釼の如くて魚を突

と枕冊子に水芰いとおそろしきものゝみかゝに多かるものゝ乃路ありしひらく乾れど 國柱按に附ハ總髪なれハ頭も髪の毛をも被りかゝれる畏ろしげなる也らちに芰をもいへるにていふ、比志てふ名の義著しみ蒺藜亦比志といふ其刺人を傷るの鋭利なるをいふ示そあられる並に猶怖おぢされ言なりとも力もいひしあるべし是比志なかしと訛しを本藩の比志邑をなハ芰時なるづし俗にヒツシてと唱つ通證曰芰蓋鰭年蹄也萬葉に年蹄を志と訓且其状をもて名を得たり又武陵記云四角三角曰芰兩角曰菱 正字通曰分菱與芰爲二物非 花鏡云兩角而小曰沙角○芰ハ池沼の中に

生し春月その葉水上に浮出て形銀杏に似たる扁厚く
光りあり邊に鋸歯あり葉下の莖に股あり蟾の股の如
しを莖葉両両相差一長ければ一ハ短く互にして出り
蝶の翅なせり其形水面に支散て多く座をなす葉に柴
重複ると絶てなし夏月も葉の間に小白花日を背て宛
あり昼ハ含み宵炕く月に随て轉り移る酉陽雜俎云菱花開背日英花
開向日故菱寒英暖花落て実生る水中に向て漸と熟す実に稜峭
あり或は四角三角或は四角六角或亦角なきものあり
此角なきもの参河菱と以て参河にて産す一種葉実
倶に小ものあり綱目所謂野菱其角硬直刺人其色嫩青老黒又花鏡云最小而四角有刺着曰刺

菱花紫色と云是なり又一種葉実倶に大なるものあり
本艸所謂家菱種于陂塘角耎而脆亦有両角彎巻如弓形
者其色有青紅紫老則殻黒而硬墜入江中謂之烏菱是なり
又学圃雜疏云菱即芰也而多種云々産郡城者曰哥窑
蕩産於崐山者曰婁縣皆佳甚須其種種之○洞冥記
云霊池有浮根菱根出水上葉沈波下亦名青氷菱此物
既に久きより採取せり万葉集に於園欲見のきくの
池なる菱のうきをつむとや妹がみ純ぬ是あん延喜神
今食料菱子二升十二月以橘子代菱子又新嘗祭料菱子蓮子各二
升と見えたり○天皇夏の御服引衣の三重襌てふ章
は菱の重文なり重は多き義にて亦是を大文といつり其圖は嶋雄の鳥の
章と花菱の角乃最鋭利形にたる章にそあり云卿
の夏の衣半臂指貫も此章なり又華族久我家の服飾

に蓑文を用られ号を輪遠と称へ俗に輪廻ともいふこ
の章は蓑の水上に蔓延て浮ひ亘まるが輪遠の形なせ
ばかりの此称ハあるなり或説に蓑形池ハ巻数周宇作郡
に在りてハ幡大神に由緒あるなれ此文を用らるまやと
なるハ諾なるぬ説なりむかしに蓑花読などゝ各他乃
文飾に蓑を摸しこるが見えし蓋し夏の服御なるとも
て水涼の義に取り川亦畏へまの名状により威儀を示
ひ取とそおもはれ威霊仙を鑣唐艸とて衣紋に用ら
るを同し例なるん猶威霊仙の所にいふべし○凡根ハ
皆三月蔓を生して水の河深となるゝ葉ハ水上にうりふ

なり○芰ハ老たる黒子を池中に撒バ生るおと解し又
自水中に墜ても生ず実嫩ときハ剝食ひ老ては蒸煮
て食ふべし或ハ暴し乾し米に剝まぜ粥餅となしくよ
し其莖も亦暴して収免米にまぜ飯となして荒歉の飢
を救ふ又夏秋の間葉と根とを去り湯焯て油にあぶ又
糟食としてをよし致富全書には野菜中第一品也とい
へり國語に屈到嗜芰亦此物なり小説に後嵯峨天皇御宇の時常陸
國に芰を降しあることを見たるしこれど常陸国誌及正
史を検考するに此おとなし○実を肥さんと欲ばゞ夏
月葉に糞を澆あば更に美花鏡云池塘内若欲澆糞用粗

大毛竹打通其節貯肥於内注之水底若以手種者能令其
實深入泥中再灌以肥未有不盛者也又云若有萍荇相雜
須速撈去則菱出始茂とあり
氣味甘く性平にして毒なし○主治中を安くし酒毒を
解く多く食へば陽氣を損ふ

成形圖說卷之二十八終

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1